

ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Take free!

なな

11

月号

vol. 129

「なんですか？」
岸里一丁目付近にて撮影

特集

にいなりもん

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

皮革のまちを求めて①

西成区のなかでもJR環状線を挟んで浪速区大田町と隣接する北西部には、皮革業が集積している。とくに婦人靴を製造するメーカーが多い。にしなり由来の物事をふらふらと辿っていく「にしなりもん」では、まず足下にある製靴業を取り上げることとした。この界隈を闊歩している高齢者には靴を作っていた方が多い。永田和生さんは1947(昭和22)年1月生まれの現在、70歳。「高齢者」とするのがためられるのも当然のこと、仕上げという工程に従事する現役の靴職人さんである。

靴の仕事に携わるまで

永田さんのお父さんは元々、大阪・梅田の茶屋町で一家をか

まえていた。徴兵で戦争に行くと、残された家族は石川県に疎開した。戦争が終わり、お父さんは梅田ではなく疎開先の石川県に帰ってきて、和生さんはそこで生まれた。小学1年生になった頃、家族で西成・山王町に引っ越してきた。お父さんは炭屋(小売業)を営むことに。以後、仕事の都合のためか西成区内(4カ所)を転々とし、花園町の今宮小学校で卒業を迎えた。

中学校に上がると京都に引っ越し、同志社大学の北にある烏丸中学校に通った。中学を卒業すると、西成に帰ってきて南津守の鉄工所に就職し4年間勤める。その後、区内の南開にいたお兄さんの仕事を手伝うようになったのが、永田さんにとって最初の靴の仕事。このとき19歳

だった。

永田さんがここで携わったのは底付けという仕事だった。底付けとは、甲革(アップー)と呼ばれる部分と靴底を接合する工程で、主に平面状の甲革を靴型(木型)にはめて立体的にする「釣り込み」と底の取り付けから成る。永田さんがお兄さんのところで働き始めた頃は、手作業の部分で今に比べて多かったのだ。朝7時から夜中まで仕事して日産20足ぐらいだった。

お兄さんの下で学びながら底付けの仕事をしていたのは2年ほどで、そこからは独立して鶴見橋の宮本製靴で雇われることになった(21歳)。当初の給料は月で3〜4万円。当時の大卒社員で1万3〜4千円だったので、一般よりも実入りがよかったようである。就職して8年ぐらい経つと、永田さんは現場の管理業務も任されるようになった。その頃には底付け作業からは離れ、商品価値を高める

ために革の外観や耐久性などを改善する仕上げ作業に就きつつ、営業も手がけるという、いわゆる「番頭さん」のような役回りをつとめたのだった。

鶴見橋商店街の賑わい

永田さんに当時の様子を尋ねると、戦後の高度経済成長期、鶴見橋商店街が連日混雑で動けないぐらいの人だかりだったことを強く覚えておられた。なかでも1、2番街には靴屋や革屋、材料屋が軒を連ねていた。商店街に来る人は付近の靴職人やメーカー、その家族ばかりではなかった。いつときは「西成といえは革靴」とも言われたぐらい、大阪中から靴や材料を買い付けに来ていた。商店街全体に活気があり、夜中の12時まで開いていた店も少なくなかったという。

正月前は仕事に忙殺された。工場の前で問屋が製品の完成を



永田さん制作の婦人靴

待つて座り込んでいる。そうすると家に帰ることもできない。夜中3〜4時まで仕事をやって、朝8時から仕事をやっているときもあった。あまりの長時間のため足が思うように定まらずひっくり返ることもあった。納品で自転車に乗っていて、突然気を失ったように「ドスン」と音をたてて倒れ、それでも道端で眠っている職人も一人や二人じゃなかった。寝る間もないくらい忙しかった。しかし、正月になると十日戎まではずっと休み。「昔はそんなもんや」と永



永田 和生さん



昭和 39 年（推定）の鶴見橋商店街

田さんは懐かしそうに、そして楽しそうに語ってくれた。

職人技の残る靴

永田さんの記憶によると、靴

の仕事に就いて10年ぐらい経つと、業界全体が機械化していくようになった。勤めていた宮本製靴にも機械が導入された。これにより製靴業の全工程が大きく変貌するが、機械の操作には

報酬の受け取り方にも影響するようだ。永田さんは、前任の「番頭さん」が辞職して配置換えがあったときに給料制にしてもらったそうだ。それまでは会社の都合で、仕事のあるときにはその分だけの報酬がもらえたが、ないときには支払ってもらえなかった。つまり、「一足、何ボ」の受け取り制。月に一週間程度しか仕事がないこともざらにあり、生活が安定しない。そこで、永田さんは月々の給与が一定になる給料制を選んだのである。

これに対し、製甲師は裁断された革を縫製する仕事なので、マシンがあれば自宅でもできる。個人事業主として近隣のメーカー企業から受注し納期までに製品を納める。報酬は歩合制なので、自分がやった分だけ実入りは

あるが、不安定さを拭うことはできない。さまざまなメーカーと取り引きして、常に仕事が入ってくる状態にしておかないといけない。メーカーにとって自社製品を熟知している製甲師は重宝するだろう。しかし、今は昔と比べて靴のデザインがとても複雑に

なっている。パーツが増え、一足に必要な仕事量は増えている。一方で小売価格がそれほど変わらないとなれば、それは業界全体の構造的な問題だ。

職人をまっとうする姿

宮本製靴は永田さんが37歳



手による靴制作（上）吊り込み（下）すくい縫い（いずれも西成製靴塾提供）

も先述のとおり、完全に機械化できない工程がたくさんある。加えて、各社によって使用する機械の種類も使い方も異なる。材料などを融通し合うこともない。革の種類が多様で、たとえ隣り合っているでも全くちがうものを使っているからである。

底付け師と製甲師のちがい

製靴業の職人さんは大別すると製甲師と底付け師に分かれるが、それぞれの職人の雇用形態も明確に異なっている。永田さんのような底付け師は、機械化に先がけて企業に就職するというかたちをとっていた。高額な設備を揃えるにはある程度の規模の資本が必要になる。となれば、そういう投資が可能な企業が設備・環境を整え、その企業が所有する工場で底付け師や仕上げ師が一定時間作業に勤しむことになる。

こうした勤務体制の変化は、

のときに倒産する。「番頭さん」だった永田さんはそのときの整理で大変苦労されたそうだが、その手腕が見込まれたのか、切れ目なく同区内の婦人靴メーカーに再就職することができた。以後、定年までの31年間を勤めあげた。しかし定年退職後の現在も、永田さんは浪速区大國町にあるメーカーで仕上げの仕事をしている。

なぜ今も仕事をされているのかを尋ねてみると、「靴に限らずモノを作るのが好き」なのだという答えが返ってきた。現在は仕上げをやっているが、すべての工程を見て知っているの、機会があればサンプルを作ることもあったという。ご自分の靴も自分で作って、それを今も履いているというので見せてもらった。職人をまっとうする永田さんのもう一つの姿がそこにあるように感じられた。



だん

こども食堂ネットワーク関西

イベント告知！



[沖田一志] 新米が美味しい季節ですね。我が家では玄米を毎日精米して炊いています。玄米は道の駅とか農家でまとめ買いしているので、しばらく去年の米が続きます。早く新米を食べたいな。



おもしろい ひとひと

地域にねむるヒト資源。その気で探すといえるオモロイ人が、『なび』はオモロイ獲物をさがして今日も行く。隔月でおくる新シリーズの誕生！

このまちのロッカー ダンシング義隆さん
(ミュージシャン)

義隆氏(64)は、小学生のころひどい近視だった。眼鏡店で初めてメガネをかけたとき、世の人々はこんなにきれいに世の中が見えていたのかと、びっくりした記憶を語った。しかしこんなメガネをかけてしまうと、もうモテないとも思い、笑いを取ろうと漫才をやりだし、クラスで人気モンになっていた。彼はまた音楽にも興味を示し、作曲をはじめ兄弟たちに曲を提供したりしている。また勉強はしないが漫画はよく描いていたともいう。

『誰かカバやねんロックンロールショー』(誰かバ)は、滋賀県出身の松浦兄弟らが中心となって結成されたバンドで、義隆氏はボーカルを担当した。70年代後半の[88 rook day]でグランプリを獲得しデビューした。80年代には関西を中心に活動を始め、とくにTVでは、ブレイク直前の明石家さんまや紳助らとの共演のほか、自らの番組も持ちながらR&Rやブルースを歌う一方、コミックソングでも人気を確保していく。そんな義隆氏の来歴には、幼年期のエンターティナー願望のようなシルエットが彷彿として見える。

それでもバンド当時から、「自分は女にモテようとしてミュージシャンになったのではない。自分の気持ちに正直な歌を表現したかった」といい、『誰かバ』は、そのころ相当なパワーを発揮していて、さんまや紳助らとのコラボレーションは、相互に影響を与えていたと思う。実際吉本からも引き合いがあった。笑いを取ることは好きだが、音楽はそれ以上に魅力を感じていた」ので音楽を続けてきたのである。

その後バンドは解散し、それぞれに音楽活動が続けられていくのだが、そこに至るまでには、兄弟たちとの確執とか家族問題があり、義隆氏の人生上のターニングポイントになっている。だがここではそれらの複雑さは省略しておこう。

08年の頃、義隆氏はマリファナ所持容疑で逮捕、起訴された。出所した後たった一人で、障がい者たちが利用する福祉施設を訪問した。「そこで気が付いたことは、音楽を楽しむ人たちはたくさんいる。けれど本当に音楽を必要としている人、真に自分を求める人たちがいること、自分が必要とされていることが嬉しかった」。

『誰かバ』という看板を背負って先頭を走っていた義隆氏が、看板を失くしてしまっただと、喪失感があったのかどうかを聞きたいと前から思っていた。

だがそんなことはどうでもよいことなのだと以下の言葉で気づいた。義隆氏は言う。「自分が耕してきた畑は大切にしたいし、それは楽塾DJ(*)がしている『雑色系の音楽』というテーマが自分にもあてはまる。つまり、これまで様々な養分を蓄えてきたことが必要とされ、思想、教条などで音楽をやるのではなく、人間の相性や縁なんかを大切にしていこうと、これからは思っている」と話し、そこが義隆氏のこれからの位置であると感じたからだ。過去などどうでもよく、今はそれがすべてなのだ。狭い地域でもいい、メジャーでなくともいい、その地にしっかり根差す町衆が聞く耳を持ってくれるなら、彼はロッカーとしてやり続けると思う。

彼はしんどい連中の面倒見がいい。そんなとき私も相談を受ける立場になる。重度な人には早い手立てが必要だとアドバイスもする。「音楽は社会を替えられる。音楽には力がある。それを信じている」と義隆氏。その背景には音楽があり、R&Rを友とし、困った友をも助けて今も転がり回っている。

レポート:佐々木敏明

(*)「楽塾」で実施しているディスクジョッキーシリーズのプログラムのこと。

ダンシング義隆さん



[安田拓也] ある歌手のライブに参加しました。「喉を痛めた」と告白してからのスタートには、ショックを受けた。けれど懸命に届けようと、一言ずつ丁寧に歌う姿に余計感動。



[西田吉志] 11月は個人的に地域のお祭り、日帰り健康ツアー、スポーツ大会、学習会など、参加するイベントが盛り沢山です。今年は夏らしいことがあまりできなかった分、秋を満喫しよっと。

井筒民千代(いつつ たみちよ)さん

今月のおとなりさんは、いつもお洒落な紳士オーラを放つ井筒さん。12人兄妹の5男。ちなみに「民千代」の「民」はお父さんの名前から、「千代」はお母さんの名前からとって付けられた名前だそうです。仕事や交友関係など、今まで出会う人に恵まれてきたみたい。それは気さくな性格と温かみのある人柄の井筒さんだからこそだと思います。山登りと野球が好き。でも一番好きなものはお酒。「酒に飲まれたことはない」という井筒さんだけど、最近はお医者さんから少し控えるよう言われているみたいです。お酒はほどほど程度にいつでも健康をお願いします。



たぐの 3くふうたま

豊 間

出会で豊かに

ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

このまちを歩くと、昔ながらの文化住宅と造の建物によく出会う。狭い敷地の建物には急な階段が据え付けられていて、ビックリすることもある。風呂なしでトイレも共同と言う昔ながらの環境も多い。だからこそといつては何だが、トイレ・風呂付物件よりも、外に出向いたり、人と出会う機会が多くなる。この不便を楽しめれば、くらしが豊かになるのではないかと、木賃アパートに住む僕は思う。

でも、空家となった木賃アパートや長屋が壊される光景は珍しくない。空室が増えると家賃を下げるを得ないし、大家さんも高齢であればなおさら維持管理も大変だ。手放したり、ほったらかしにせざるを得ない状況がここにはある。最近はいわゆる「民泊」に生まれ変わるケースも増え、僕の住むアパートの裏手にもできた。夕方頃になると賑わう民泊だが、ちよつとばかし度が過ぎる。少しの気遣いと理解があれば互いにいい関係にもなれる可能性はある。ここにもちよつとの出会いがあればいいのになあ。

(安田拓也)



[谷口円] 先日、絵を買いました。同世代の作家で、とても純粋に絵に向き合っている人。やっぱり作らないと、私にとっては生きてる面白みがなく、かもしれないということを思い出した日でした。



[田岡秀朋] 国立歴史民俗博物館の企画展「1968年」-無数の問いの噴出の時代-に行きたい。早占点で会場を吹田の民博と勘違していたけど。

号外 マナビバ！通信

「まずは、おいでよ。」ゆ〜とあいには中学を卒業してから進路を一緒に考える場所と時間があります。そんな「フリースペース マナビバ！」の徒然な日常をお伝えします。

マナビバは毎週火・木曜日の10:00～16:00、ゆ〜とあい2階でオープンしています。
電話:06-6561-8801 Mail:info2@human-ref.jp



高卒認定

様々な事情で高校を卒業できなかった人が「大学に行きたい」「資格を得たい」と考えた場合、高卒認定試験(旧大検)があります。8月と11月に試験があり、平成28年度の受験者は25535人(文部科学省発表)。合格すると大学や専門学校受験資格はもとより、公務員試験や各種の国家試験の受験資格も得ることができ、就職や正社員採用への間口も広がります。

いい事づくめですが、合格するには、かなりの学習が必要なことは言うまでもありません。試験科目は8科目。一度合格した科目に有効期限はなく持ち越しが可能なので、何回も挑戦ができます。合格点は科目によって毎回違うので、40点で合格する科目もあります。また、高校で取得した科目の単位なども一部認められる場合もあります。複数の受験で合格する方法

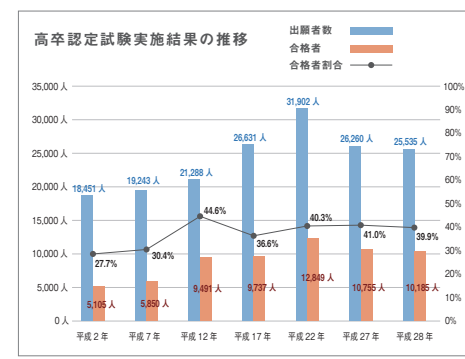


複数の受験で合格する方法

もあり、単純な合格率判定はできませんが、受験者の概ね4割が高卒認定されているようです。

マナビバでは、高卒認定の過去の問題集を揃え、受験要綱(募集用紙の取得や会場一覧など)もあります。学習計画も一緒に考えていきます。現在、高卒認定合格をめざす利用者は来年度の試験に向けて、少しずつ勉強を始めています。家でも自学をしているようです。遊ぶだけでなく、このような新しい目標に向かって再スタートを応援するのがマナビバです。

文責…阪井 茂



い湯かげん

「選手と観客」を超えるのが公務員改革と思ってきたが

元々、小泉政権時代の竹中平蔵さんが流した風説だと思うが「公務員は多すぎるし、賃金は高すぎる」を土台に、橋下さんのおさか維新は、無駄をなくす行政改革の象徴として公務員を叩き、見事に「ふわあ」とした民意」を掴んだ。戦い済んで何とやら、日本の公務員数はOECD(経済協力開発機構)平均をうんと下回るほど少ない。相対的に賃金は高かったが、大阪が象徴するように、今では随分引き下げられた。そのためか、大阪は教員も思うように採用できず、人材はよそに流れている等々、何だか真逆の「公務員少ない説」が目立ってきたように思う。ボクは、公務員改革に共感し

た一人だが、多いとか少ないとか、そんな議論じゃなかったはずだと思う。橋下さんはシャープでスピーディな政治家だったが、清涼飲料水みたいなもので、喉元過ぎれば忘れてしまう。そんな風にあの改革を終わらせられたらたまつたもんじゃなと思うから、もう一度この問題をおさらいしておこうと思う。

橋下さんが、公務員問題で、口は悪いが的を射ていたのは、一つは、例えば家庭ごみの回収や地下鉄など、公務員でない方が効率的だし持続性がある業務を、漫然と維持するのではなく改革するということの方針だった。ボクは賛成で、問題はその移行のやり方だと思っ



(株)ナイス代表取締役
富田 一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからの「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司] 自分が言の端でこんなに一喜一憂するとは思ってなかった。今の時代、コミュニケーションのツールはたくさん揃っているけど、使いこなせていないことを痛感。いやいや、難しい。

[山村裕太] とある場所でさいばしを食べた方が言いました。「さいばし？ サイの肉ですか！？ サイの肉で初めて食べます〜！」ググってください。

以前に隣保館を学校に見立てて事業を考えようと思った。実際に識字事業や子どもの学習支援なども実施しているが、さらに生涯学習という分野で様々な学習活動を展開してみたい。「喫茶なび」で熱心に新聞を読んでいる高齢者も多いので、「高齢者大学」なるものができればと思う。人権、政治、日本史、世界史、文化、経済などの楽しい講座を揃えたい。初めから多くの人が集まるわけではないので、少しずつ講座を開いていきたい。講義をしてもらえる先生を探そう！どなたか出来る先生がいたらご紹介してください。

ホームページにも掲載したいなあ。他ではやっていない講座を考えて、大阪市内からも来てもらえる隣保館にしたい。事業の企画会議も本格的に始まり、みんなが責任をもって一事業を担うようになっている。うまく機能して、スタッフが丸となって頑張ってくれればと思う。

(寺本良弘)

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



地域の縁を心でつなぐ

松崎 心 心の時間

私の若いころ、八十歳を超えたご婦人に、「おばあさん」と呼びかけましたら「おばあさん」と呼ばんといて。私、まだ若いんやから。」と叱られました。ご婦人は、白髪を染めて、若い方が着るような服を着ていました。このご婦人のように、少しでも若くありたいと思うのは、誰もがわずくことでしょう。それで

も、若ければ良いというものでもありません。私の場合、ご婦人の「心」に触れずに「おばあさん」と呼びかけたのは、若さゆえの経験不足のためでした。若さは、時には人の「心」を傷つけても、分かっ
ておりません。人が成長していく為には、歳を重ねることも大事なことです。嬉しいことだけでは、苦しみや悲しみと出会うことで、「心」が成長し、見えて来る世界が広がってゆくのです。そして、人として深まっていくのです。

私の「心」には、たくさん思い出があります。これは、大切な命の時間を使って頂くことができた宝です。だから、歳を重ねることに、虚しさを感じるよりも、命有る限り「心」に宝を蓄えて「心」豊かな一日を過ごしたいです。

松向寺 通法

自分の子の時よりも楽しんでしまったかな？

梅南中学校文化祭と長橋小学校運動会でスポーツ・文化の秋を体感してきた。梅南中学校では、家に帰りたくないと思隣保館で泣いていた生徒がキレッキレのダンスを披露してくれて、とてもカッコよかった。長橋小学校では、始めのラジオ体操から、地域で見る顔とは違った真面目な顔を見せる3年生をずっと眺めてしまった。その後も、学年が変わっても地域で知り合った子どもたちが登場すると、赤白関係なく応援してしまった。子どもと対決する綱引きでは、引込み思案な保護者の方を無理やり呼んで、参加してもらった。親子で顔を合わせた対決が実現し、きつといい思い出になったと思う。運動会の最期を飾る組体操もよかったが、演技を見終えた担任の先生の涙にもらい泣きそうになった。感想ばかりだが、隣保館や地域の取り組みがなければ、きっと退屈な運動会になってたと思う。楽しませてもらったので、今度は子どもに楽しんでもらう番だと感じた。

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！



なび編集長 寺嶋公典

smile
ゆーとあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆーとあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 11月号 (vol.129)

発行日: 2017年11月1日 (創刊日: 2007年1月1日)

発行: 株式会社ナイス

発行人: 代表取締役 富田一幸

住所: 大阪市西成区長橋 3-6-33

電話: 06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp

url: http://www.nice.ne.jp/

編集長: 寺嶋公典

編集: 飯島照喜、沖田一志、佐々木敏明、

田岡秀朋、西田吉志、安田拓也、山村裕太、

若松司 (あいうえお順)

イラスト: hidarimaki デザイン: 谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

